

門を開き 橋を架ける



皇紀2600年 農芸化学科卒業アルバム より

写

真は、昭和14年の五月祭のときに撮影された仮門（現在の南門）です。この門は、農学部が駒場から弥生に移転したのを機に造られました。実は、当時、言問通りの下に地下道を通す計画があり、そのための測量もほぼ終わっていたそうです。関東大震災後のキャンパス復旧計画を主導した内田祥三の当初の計画では、現在の法文1号館から農学部まで、言問通りをくぐって南北に走る道路が描かれているので、地下道の建設は以前から準備されていたのかも知れません。しかし、当時の帝国大学新聞によると、ちょうどこのころ、弥生坂まで進んでいた言問通りの拡張工事の計画があったため、東京市から待たされたがなかったようで、代わりに「仮の門」が工学部側とペアで造られることになりました。いずれにせよ、この門のおかげで、本郷地区との行き来が容易になりました。

一方、地下道ですが、その後、農学部3号館の建設と絡めていったん話が出たそうです。しかし、戦争により3号館そのものの工期が大幅に遅れ、一部未完成のまま終戦を迎えてしまいます。言問通りが拡張されたのは、さらに20年近く経った昭和38年ごろのことでした。そのとき、道路拡張に合わせて東京都によって造られたのは地下道ではなく「陸橋」でした。そして、ペアになっていた工学部側の仮門は廃止され、農学部側の仮門だけが残ります。（上の仮門の写真で、工学部が今より近くに見えるのは、当時の言問通りの道幅が5メートルで、道路拡張の際、農学部側の敷地が削られたためです。）

現在、南門は、浅野地区、根津方面との行き来に利用され、陸橋とともにキャンパスの開かれた門の役割を果たしています。いま農学部では、最先端の研究分野で内外のさまざまな交流・連携を深める取り組みが行われています。研究の門を開き、人の橋を架ける。可能性を上げ、夢を拡げる。そうした取り組みが農学の地平をさらに拡げていくことを願っています。

応用生命工学専攻 生物情報工学研究室

清水謙多郎 教授